

## 主日礼拝説教「羊飼いの美学」予稿

日本基督教団石神井教会 2022年5月1日

### 【旧約聖書日課】エゼキエル書 34章7～15節

7それゆえ、牧者たちよ。主の言葉を聞け。8わたしは生きている、と主なる神は言われる。まことに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者がいないため、あらゆる野の獣の餌食になろうとしているのに、わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は群れを養わず、自分自身を養っている。9それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。10主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。

11まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。12牧者が、自分の羊がちりちりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から救い出す。13わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土地に導く。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを養う。14わたしは良い牧草地で彼らを養う。イスラエルの高い山々は彼らの牧場となる。彼らはイスラエルの山々で憩い、良い牧場と肥沃な牧草地で養われる。15わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。

### 【使徒書日課】ペトロの手紙一 5章1～11節

1さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。2あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためではなく献身的にしなさい。3ゆだねられている人々に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい。4そうすれば、大牧者がお見えになるとき、あなたがたはしばむことのない栄冠を受けることになります。

5同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜなら、

「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる」  
からです。

6だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただけます。7思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけてくださるからです。

8身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。9信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに遭っているのです。それはあなたがたも知っているとおります。10しかし、あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてくださった神御自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、揺らぐことがないようにしてくださいます。11力が世々限りなく神にありますように、アーメン。

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 10章7～18節

7イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。8わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。11わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。14わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

### 「神の小羊たちよ！」【こども説教のために】

「神の小羊たちよ」と、子どもたちだけでなく大人の皆さんのことも、今日はお呼びしましょう。いつもそうお呼びしても良いのですが、今日は特に、そうお呼びするように、ご復活の主イエスに教えられているようです。

最初のイースターの後、弟子たちの集まるところに現れてくださった主イエスは、弟子のペトロに、こう命じられたそうです、「わたしの小羊を飼いなさい」（ヨハネ 21:15）、「わたしの羊の世話をしなさい」（同 21:16、17）と。

主イエスは、神と人との関係が羊飼いと人の関係でたとえられてきたことを、よくご存じでした。安息日の礼拝で、詩編 23 編を唱えることもあったでしょうし、エゼキエル書 34 章の朗読を聞くこともあったのです。

御父である神が「羊飼い」として「羊の群れ」である人間を導かれるのであれば、ご自分も「良い羊飼い」としてすべての「羊」を守り導くのは、当然でいらしたでしょう。そして、死んでご復活された主イエスは、弟子たちの間に現れられて、彼らにも、御父やご自身と同じ「羊を導く」働きをするようにと、お命じになられたのです。そこから、教会が始まりました。

神の小羊たちよ、わたしたちは、「良い羊飼い」になるのは難しいかもしれませんが、「良い羊飼い」である主イエスの御声を聞き分けることはできるでしょう。互いに御声を教える「羊飼い見習い」から始めればよいのです。

## 《羊の門》を出たり入ったり…

こどもの教会（教会学校）の活動をする会堂 1 階のスペースの壁に、羊の群れを表した大きな模造紙が掲示されていたのをご存じでしょうか。小さな羊の形をしたカードがたくさん貼られています。羊の一つひとつに、子どもたちの名前や学年などが記されています。新年度を迎えると学校の紹介で新しく来る子どもも多くいましたので、毎年更新していましたが、ここ三年、感染症の自粛もあって、更新が途絶えてしまっていました。今年、久しぶりに更新することにしましたが、奉仕者の皆さんが相談して、今回は《羊の群れ》ではなく、《鳩の群れ》になりました。先週から、子どもたちが順次、自分の《鳩》を作って、貼り付けています。

鳩は羊のように群れを作る動物ではありません。「羊飼い」ならぬ「鳩使い」はいるようですが、「鳩使い」に世話されなくても鳩は生きていけます。「鳩使い」は、「伝書バト」という特別な訓練を施すために、鳩の世話をするのです。「伝書バト」として飼われなければ、鳩は気ままに生きています。けれども、ひとたび「伝書バト」として飼われ、「鳩使い」から訓練を受けると、もはや気ままに生きているわけにはいかなくなります。遠く離れた地に連れて行かれ、伝文を託されてそこから放たれるや、最後自力で飼われていた巣に戻って来なければいけません。「鳩使い」は、鳩を空に放したら、後は鳩を信じて待つしかないのです。

教会に来ている子どもたちを《鳩の群れ》としてイメージした奉仕者たちは、もちろん、そんな過酷な「伝書バト」のことを想像しているわけでは無いでしょう。むしろ、「空の鳥」のように、種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしないのに、天の御父が養ってくださっていることを知って、自由に生きてほしいとの願いが込められているのかもしれない。

ただ、わたしは、奉仕者の皆さんに、《鳩》を「聖霊」と結びつけて考えるようにとお勧めしました。復活の主イエスに「わたしの羊を飼いなさい」（ヨハネ 21:17）と命じられた弟子たちは、「聖霊を受けなさい」（ヨハネ 20:22）とも告げられたのです。聖霊は、主イエスが洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられたとき、天から鳩のように降ったと言われています。わたしたちも、主イエスの名による洗礼にあずかるとき、同じ聖霊が降ると教えられてきました。復活の主イエスが現れてくださった弟子たちは、五旬祭（ペンテコステ）に、聖霊が一人ひとりに降っていることを知るようになりました。聖霊が一人ひとりに留まっているのならば、教会に集められた一人ひとりには、聖霊を意味する「鳩」が留まっていると言っても良いのでしょうか。

《羊》は、聖霊を受けて《鳩》になるのです。そのときから、弟子たちは、家に籠ることを止めました。教会とこの世を自由に行き来しだしたのです。

## それでも「羊のために命を捨てる」

もちろん、わたしたちは、聖霊を受けてからも、『聖書』に教えられているとおり、教会を「神の羊の群れ」と考えることが、一番ふさわしいでしょう。その群れの中に、特にまだ幼い「小羊」がいるのならば、大きな「羊」たちは、「羊の世話をするのは、羊飼いの責任だから、自分は知らない」とはならないでしょう。実際、羊は、群れの周辺に大きな羊が、群れの中心に小羊が、自然に位置するように行動すると言われていました。

「わたしの小羊を飼いなさい」と主イエスに命じられた弟子のペトロは、教会の長老たちに勧め、教えました。「あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい…」。

このペトロの勧めは、教会役員就任式するときにも読まれるので、「これは、役員に選ばれた人たちに向けられた勧めだから、自分は関係ない」と思っている方もあるかもしれませんが、そんなことはありません。「長老たち」と呼ばれていますが、そもそもは「年長の者」という意味の言葉なのです。

わたしたちの中には、信仰生活の長い者もいれば、最近教会に集うようになった者もいるでしょう。いわば信仰の先輩後輩関係があるのです。もちろん、主イエスという「良い羊飼い」のもとでは、先輩も後輩もありません。皆等しく「一匹の羊」、しかも「迷える一匹の羊」にすぎないでしょう。それでも、先に招かれた者は、後から来る者に対する特別な配慮が必要なのだと、主イエスはいつもお教えにされていました。先に主イエスと出会い、主イエスに従う者として生き始めたのであれば、一日でも後から来た者に対して、配慮すべき何某かをすでに与えられているはずなのです。

それでも、皆さんは、ペトロから「あなたがたのうちの長老たち」と呼ばれると、「いえいえ、わたしなど…」と、妙な謙遜を始められるのでしょうか。確かに、わたしたちは皆、長い信仰生活を重ねていたとしても、なお欠け多い者どもです。教会の中でさえ、互いの関係を壊してしまう失敗を繰り返してきました。「こんな自分たちが、長老と呼ばれる資格はない。ましてや、羊の群れを牧するなど、とんでもない」と、心の中では皆、思っているのです。

けれども、そのわたしたちのために、主イエスは、死んでくださったのです。死んでみせてくださったのです。「羊飼いは羊のために命を捨てる」のです。わたしたちの駄目さに最後まで付き合ってくださいます。わたしたちの罪をご自身の身に引き受けてくださるのです。そうであれば、わたしたちは、「神の羊の群れ」の中で、互いを「良い羊飼い」から託された「小羊」として心に留めるのです。わたしたちの命の日々をその一人と分かち合い、死に至るまで共に「神の羊の群れ」に連なり続けることを願うのです。